

夏植えハナニラの養分吸収特性

表 施肥かん水方法と収量および三要素の吸収量^{a)}

区	施肥方法 ^{b)}	施肥量 (kg/10a)			かん水量	可販品収量 ^{c)} (t/10a)	吸収量 ^{d)} (kg/10a)		
		窒素	リン酸	カリ			窒素	リン酸	カリ
①	かん水同時施肥—基肥なし	40.9	16.4	32.8	200mL/株/日	2.70	23.3	8.5	26.2
②	かん水同時施肥—基肥減肥	51.7	26.7	43.4	200mL/株/日	2.74	25.4	8.5	30.2
③	対照(現地慣行) 基肥—追肥	69.0	37.2	39.4	400mL/株/回 (pF1.8でかん水)	2.64	26.0	8.2	28.8

a) 7月上旬定植で翌年5月末まで調査。

b) かん水同時施肥；くみあい液肥2号、基肥減肥；園芸有機配合777、対照基肥；トリプルリレー・園芸有機配合777、対照追肥；くみあい液肥2号
なお、追肥は、定植120日後から週1回の間隔で実施。

c) 可販品は花茎長が25～35cm。

d) 吸収量は、地上部（花茎、茎葉（枯死葉除く））と地下部（根除く）の吸収量の合計。

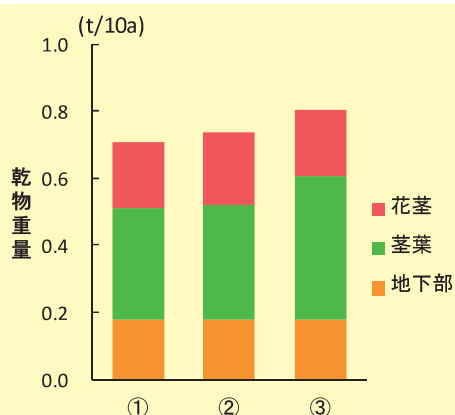


図1 栽培終了時の乾物生産量（枯死葉除く）

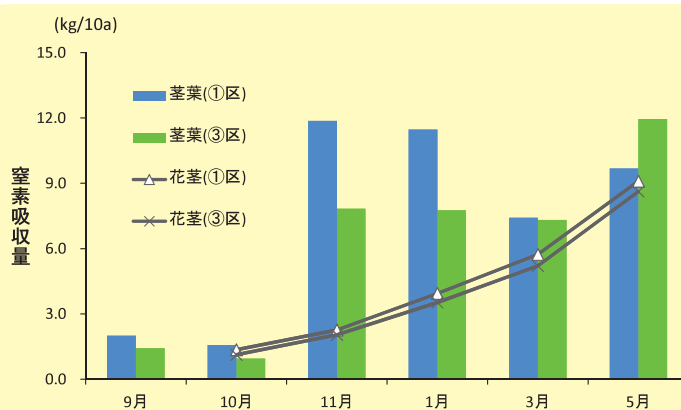


図2 各調査時点における茎葉（枯死葉除く）の窒素吸収量および花茎の累計窒素吸収量



ハナニラの栽培の様子

高知県では、消費拡大が期待される有望品目の一つとしてハナニラを取り上げ、各地域への普及に取り組んでいます。しかし、養分吸収量や施肥管理技術の十分な検討は行われていません。そこで、栽培導入当初の主要作型である7月定植ハナニラの養分吸収特性について調査しました。

乾物生産量は、茎葉（枯死葉除く）が全

体のおよそ5割を占めており、花茎、地下部はほぼ同量でした（図1）。養分吸収量（枯死葉を除く）は、どの施肥方法でも窒素が25kg/10a程度、リン酸が8kg/10a程度、カリが28kg/10a程度でした（表）。また、茎葉（枯死葉除く）の窒素吸収量は、調査時期により変動しましたが、花茎では、栽培の経過とともに増加しました（図2）。

なお、かん水同時施肥栽培では、対照区より窒素施肥量を2～4割低減して栽培しても、対照区を上回る可販品収量が得られ、施肥効率の著しい向上が認められました（表）。

今後は、産地で導入が進んでいる3月定植作型について、養分吸収特性に基づく効率的施肥技術の開発に取り組んでいきます。（土壌肥料担当 ^{そがわ} 十川由起 088-863-4915）